

だいきく通信 第二十三号 「秋の号」

ついでに

日頃より当神社での神明奉仕にご協力を賜り、ありがとうございます。

すっかり秋の陽気となりました。今年の夏は、関東・東北豪雨による大きな被害、熊本・阿蘇山の噴火と、自然の猛威を思い知らされる出来事がありました。この国の自然と向き合い、どのように付き合っていくか、真剣に考えることを求められていると思います。

社報「だいきく通信」第二十三号をお届けします。今回の内容は、催し物のご報告、神社に関する豆知識をお伝えする「お宮あれこれ」などです。お楽しみいただければ幸いです。

大國神社 宮司 大島資生



大國神社の今

前号を発行して以降、二つの催し物を行ない、いずれも盛況のうちに終了いたしました。講師をおつとめくださいました小島ゆかり先生、素晴らしい演奏をご披露くださいました小林久美さんのお二人に、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。ご参加くださいました皆様、本当にありがとうございます。

(1) 第一回だいきくセミナー「小島ゆかり先生講演会」を開催しました。

六月二十七日(土)、歌人の小島ゆかり先生をお迎えし、「短歌をたのしむ」というテーマでお話いただきました。

小学生から九十六歳のご高齢の方まで、さまざまな年齢層、さまざまな背景をもった人たちの想いが生き生きと綴られた短歌のほか、現代歌人による作品も紹介され、短歌の楽しみを多面的にお教えくださいました。小島先生のお話に触発され、もっと短歌を味わってみたい、さらには自分でも作ってみようと感じたかたも多かったのではないのでしょうか。



(2) 第一回だいいこくクラシックス「小林久美さんヴァイオリン・リサイタル」を開催しました。

十月四日(日)、東京都交響楽団で第二ヴァイオリン副主席奏者をお務めの小林さんによるミニ・リサイタルを開催いたしました。小林さんと同郷の長野の作曲家、竹内邦光氏の「落梅集」を中心に、バッハの無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ第一番よりアダージョ、そしてホセ・ラガジェの「アマポーラ」を始め親しみやすい小品集を聴かせてくださいました。ヴァイオリンのみという無理なお願いにもかかわらず、小林さんは快くお引き受けくださり、誠実な、想いのこもった演奏で、充実したひと時となりました。



当神社では、お宮を少しでも身近に感じていただくため、今後も「だいいこくクラシックス」「だいいこくセミナー」をシリー

ズ化して続けていきたいと考えております。詳細が決定し次第、その都度お知らせいたします。どうぞお楽しみに。

お宮あれこれ「厄年」

毎年、新年には厄年のお祓いを受けるかたがたくさんいらっしゃいます。今回は「厄年」についてお話ししましょう。厄年は現在では災厄が多い年齢とされることがほとんどです。一年の安全を願ってお参りすることは自然でしょう。何歳を厄年とするかについては、地域による差もあるかと思えます。神社で厄年としてご案内している年齢は次の通りです。

男性

前厄	厄年	後厄
二十四歳	二十五歳	二十六歳
四十一歳	四十二歳	四十三歳
六十歳	六十一歳	六十二歳

女性

前厄	厄年	後厄
十八歳	十九歳	二十歳
三十二歳	三十三歳	三十四歳
三十六歳	三十七歳	三十八歳



このうち、特に男性四十二歳、女性三十三歳は「本厄」「大厄」とされています。それぞれの厄年の前後の年は「前厄」「後厄」と呼ばれ、厄年に準じて、身の回りに気を配るのがよ

いとされています。また、最近では女性でも六十一歳を厄年と考えてお祓いを受けるかたも多いようです。

前頁でお示した厄年の年齢は数え年によるものです。数え年というのは生まれた時を1歳と考えるもので、通常用いられる満年齢とはずれが生じます。

また、厄年は干支とも関連します。当神社では誕生日が節分より前のかたは、前の年の干支と同じと考え、厄年もそれに合わせてご案内しています。

厄年とされる年齢はちょうど社会的な立場が変化する時期に当たり、そのため肉体的にも変調をきたしやすいので、注意を促す意味合いがあったのかもしれませんが。

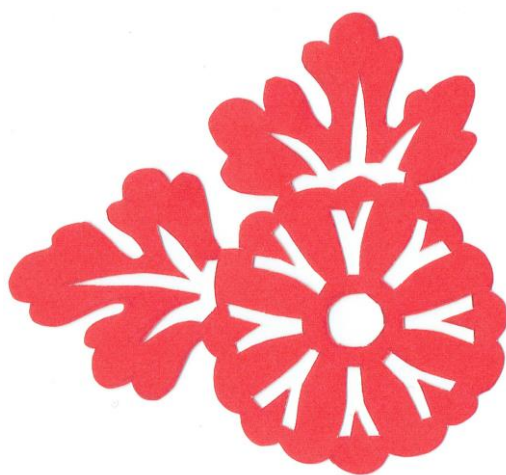
本来、厄年は還暦や古希などの年祝いと同様に晴れの歳と考えられていました。厄年になるということは、地域社会の中で一定の地位や役割を担うということでもありました。そのため、神社のお祭りや運営に関わり、神輿を担ぐなどさまざまな神事に携わることも多かったのです。神様にお仕えするにあたっては心身を清浄に保つ必要があります。「物忌」に服しなければなりません。物忌とは、神事に参加するための準備として、一定期間身を清める潔斎を行なうことです。

したがって、「厄年」の「厄」は本来、神様にお仕えするという「役」を担う年ということであり、「厄年」はすなわち「役年」だったのです。

本来の「身を清める」ことが「穢れをはらう」、さらには「災難をはらう」という風に理解されるようになり、そこから現在のような意味合いで使われるようになったのでしょう。

なお、当神社で厄年のお祓いをご希望になるかたには、「災難除けの意味合いで、いつも身近に置いて使っていただけ「肌守り」をお渡ししています。

厄年は、良くないことが起こる年なのでは、というふうには否定的にとらえられがちかもしれませんが、しかし、本来の意味合いに立ち戻って考えてみると、むしろ人生の比較的大きな節目として、大切にしなければならぬ年齢とも言えそうです。厄年を迎えるかたは、少し立ち止まってご自分の生き方を見直してみる、そんなきっかけになさってみてはいかがでしょうか。



祭礼・祈禱などの案内

○次回甲子祭

平成二十七年十二月十四日(月) 午前五時～正午

○開運千人講祈禱祭 毎月一日 午前六時～正午まで

○お祓いのお申し込み・お問い合わせなどは下記の電話番号にお願いいたします。不在の場合は、恐れ入りますが、留守番電話のメッセージのあとで、お名前・お電話番号・ご用件をお話してください。のちほどこちらからご連絡いたします。

○諸祈禱受付 商売繁盛祈願、心願成就祈願、厄除け、お宮参りなど、随時祈禱を行なっております。祈禱日時については、お電話にてご相談ください。



(連載まんが)

大吉うさぎ ～神無月のお話～

くま こまち 作



〈お問い合わせ・お申し込み〉

○三三三九一八一七九三〇(携帯) ○八〇一八九七七八七二六

eメール daikokujinja@gmail.com

次号発行予定

「だいきく通信」第二十三号、いかがでしたか。次号「冬の号」は、平成二十七年十二月十四日の甲子祭に発行予定です。

「だいきく通信」第二十三号 平成二十七年十月十五日発行
編集・発行 大國神社社務所

〒一七〇一〇〇〇三 東京都豊島区駒込三一一一十一

<http://www.daikokujinja.org>